

2020年4月19日（日）久宝教会 復活節第2主日礼拝

聖書 ヨハネによる福音書 20章19-31節

メッセージ「あなたがたに平和があるように」 牛田 匡 牧師

「人はその立っている場所によって、見る景色が異なる」という言葉があります。高い山の上に立っている人と、山のふもとに立っている人とは、当然見えるものは異なっています。今回の新型コロナウイルスの世界的大流行は、改め~~て~~そのことを私たちに突き付けて来ているように感じています。国の施策を見ていても誰に対して助成金、補助金を給付するのか二転三転していて、一向に始まりませんが、検討されている政策の一つ一つを聞くたびに、その政策を考える人たちがどこに立っていて、その目の中には誰がいて、誰がいないのか、などを考えさせられています。

子どもたちは学校が臨時休校になってから早くも2カ月が過ぎました。当初は保育園や小学校の学童は開いていましたが、それも先週からは休園となり、多くの職場が休業要請を受けました。そのようにしなければ、新型コロナウイルスの感染拡大を食い止めることが出来ない。少しでも早い収束のために外出を自粛して、人と会う割合を8割減らす必要がある、ということなどが、連日のように報じられています。勿論それも必要なことだと思いつつも、同時にそれが出来ない人はどうしたらよいのか、見捨てられているのではないかとも思わされています。

外出自粛や、在宅勤務により、家族がずっと家の中にいることで、世界中ではDV（ドメスティックバイオレンス）が増えたり、離婚する人が増えたりしているそうです。コロナによる「自粛疲れ」や「うつ」、「離婚」、果てには殺人事件まで起きています。「家の中にいなさい」と言われても、家の中にいられない人はどうしたらよいのか。また申請すれば様々な補助金や助成金を得られると言っても、その申請に必要な書類を整えて、的確に申請することが出来る人はどれだけいるのか。またようやく全国民に対してお金を給付するとなりましたが、その「全国民」の中に含まれない外国籍の方々や、住所を持たないホームレスの方々などはどうなるのか……。これまでの政府の態度を見ていても、「自己責任」の名の下に、形ばかりの制度を整え、その制度にまで届かない人々は切り捨てる……。弱者切り捨てるの魂胆が見て取れます。

このような時代の中、私たちはどこに立ち、何を見て、誰と共に歩んでいるのでしょうか。「隣人を大切にしたい」と思いながら、本当に「すべての命を大切に」出来ているのでしょうか。私たちの目に映っている「隣人」とはどのような人々で、私たちの目に映っていない人々とは、

どのような人々なののでしょうか。そしてまたイースターに復活されたイエス・キリストはどこに立ち、何を見つめ、誰と共にいたのでしょうか。

今日の聖書の箇所は、イエス様が十字架上で殺されて 3 日目に、死から「引き起こされ」復活し、お墓から出て来てマグダラのマリアや他の弟子たちに現れたお話の続きです。19 節からご覧ください。19 節にある「その日、すなわち週の初めの日の夕方」とは、イエス様が引き起こされ、弟子たちが空っぽの墓を発見したその同じ日の夕方ということです。イエス様が復活されたと確信したマグダラのマリアやシモン・ペトロによって、他の弟子たちも、主イエスの復活について聞かされていたことと思います。しかし、弟子たちはイエス様を十字架につけたユダヤ人たちを恐れて、彼らは家の戸を閉め、家の中に閉じこもっていました。「戸にはみな鍵をかけ」とありますが、「かんぬき」でもし開いたのでしょう。外からは誰も入って来られないはずでした。にも拘わらず、ふと気づくとイエス様がみんなの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われました（19）。

この言葉は復活のイエス様による「特別な祝福の言葉」というわけではなく、当時のユダヤ人たちの間での通常の挨拶の言葉であったヘブライ語の「シャーローム」（平和、平安、無傷、完全）をギリシャ語に訳した言葉です。出会った時も「シャーローム」、別れる時も「シャーローム」。「平和、平安がありますように」と相手を祝福するおび……。とはいえ、「これから自分たちはどうなっていくのか」と恐怖に怯えていた弟子たちにとっては、イエス様が言われたこの言葉は、いつもと同じ挨拶の言葉であっても、特別な響きを持っていたに違いありません。ですから、わざわざ 2 回も繰り返して弟子たちに言われたのでしょう。現代の日本語のニュアンスで言うと「大丈夫、大丈夫。怖がらなくてもいいよ、心配しなくていいよ」といった所でしょうか。きっとイエス様から掛けられたこの言葉によって、怖がっていた弟子たちは安心し、励まされ、強められたのではないかと思います。

そしてイエス様は続けて言われました。21 節からですが、『父が私をお遣わしになったように、私もあなたがたを遣わす』そして息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい』……。『聖霊』というと、教会の伝統では『使徒言行録』（2 章）のペンテコステの出来事に記されているように、燃える炎や鳩のイメージで理解されていますが、ここではイエス様は弟子たちに「息を吹きかける」ことで聖霊を与えたと記されています。ヘブライ語では「霊」という言葉は、「息」や「風」と同じ言葉ですから、意味としては「目には見えないけれども、確かに存在し

ていて、人やモノに影響を及ぼすもの、働きかけるもの」というところでしょう。今から 2000 年前の人々によって、口伝えで語り継がれて来た「神話的物語」としては、聖霊を受けると、急に外国語を流暢に話せるようになったというお話もありますが（使徒 2）、ここではむしろそんな特別な超能力を与えないまま、「あなたたちはそのままの弱いまま、私はあなたがたを遣わします。そこにあなた自身の力を越えた、神様の力が働くのです」ということをイエス様は伝えられたのではないかと思います。

24 節からは新しくトマスという弟子が登場しますが、このトマスは他の弟子たちがイエス様に会った時に、一緒にいなかったそうです。なので、他の仲間たちが「私たちは主を見た」と言った時、トマスは言いました「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をその脇腹に入れなければ、私は決して信じない」(25)。この言葉の故にトマスは、後世の教会から「疑い深いトマス」という不名誉な名前が付けられました。ですが、ここでトマスは「私たちは主を見た」と言う仲間たちに対して「そんなのは嘘だ。復活なんてあり得ない」と言い張ったのでしょようか。むしろ仲間たちが「私達は主を見た」というのを聞いて、羨ましかったり、悔しかったり、妬ましかったりした故の言葉だったのかもしれませんが。

何故、イエス様は他の人たちには現れて、自分には現れてくれないのか。自分と他の人たちとの違いは何か。自分は他の人たちに比べて足りない所があるのか……。きっとトマスは色々なことを考えながら過ごしていたのだろうと想像しますが、今度は八日目に、そんなトマスや弟子たちの所に再びイエス様が現れました。「あなたがたに平和があるように」「大丈夫、大丈夫。心を乱さなくても大丈夫」……。そしてトマスに言われました「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。あなたの手を伸ばして、私の脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」(27)。更に「私の主、私の神よ」と言ったトマスに対して「私を見たから信じたのか。見ないで信じる人は、幸いである」(29)とも言われました。

この最後の言葉は、疑い深いトマスに対してあえて自分の傷跡を示して復活を認めさせた上で、「あなたは目で見て手で触ってから私の復活を認めたから二流だね。見ないで信じる人の方がより優れているんだよ」とわざわざ言っているのでしょうか。疑問に思います。そもそも 20 節の時点で、トマス以外の弟子たちも、イエス様に手と脇腹とを見せてもらっていますから、彼らが見てから信じたトマスよりも深い信仰を持っているわけでも何でもありません。ここで「手と脇腹の傷跡」と書かれているのは、「今、私たちと共にいる方は、紛れもなくあのイ

イエス様である」ということを示すことであり、それ以上の深い意味はないのだろうと思います。

このお話の中心は、復活の神様がどこに立ち、誰を見ているのか、どこに現れてくださるのかおとということでしょう。復活の神、「死」すら越えられる方は、恐怖に怯えて縮こまって閉じこもっている人たちの所に、扉を越えて現れ、働きかけて下さるということ。仲間を信頼することが出来ず、卑屈になっていたトマスの所に、そんな状態だったからこそ、そこに神様の業が現れたということ。それがこのお話の中心ではないかと思います。

今、新型コロナウイルスに感染しないように気を付けながらも、いつの間にか感染してしまい、病氣と必死に戦っておられる方々が沢山います。また感染しないように「家にいなさい」と言われても、狭い家の中でストレスをためる人たち、ケンカをしてしまう子どもたちや夫婦、家族がいます。政府や自治体による休業要請を受けて、仕事が無くなり収入が無くなった非正規雇用で働く人たち、また人々の外出自粛を受けて、経営が回らなくなってしまった人たち、いつまで続くのか先の見えないこの難局を乗り切るだけの安定収入のない人たちがいます。また人々の生活を守るために日夜働いている、医療従事者や介護従事者、消防や警察、そしてスーパーやコンビニエンスストアなどの小売業の方々がいます。十字架での死から復活され、今も生きておられる神様は、そのような人たちと共におられます。決してゆとりもなく、その日その日をつないで行くことに必死になっている方々の間に、閉め切った扉を越えてイエス様は現れます。「あなたがたに平和があるように」。「大丈夫、大丈夫。私がいるよ。一緒にいるよ」。

だから、諦めずに今自分が立っている所から、周りを見回してみましよう。特別な力も能力も持たない私たちです。臆病な私たちです。けれども、神様は、そんな私たちをそのまま派遣されます。外出の自粛や、人との接触を減らす必要があり、これまで通りに行かない事も多くありますが、隣りの人たちのしんどさを、他人事にせず自分の事として受け止め感じられる感性は、神様から与えられた大切な能力です。そして隣の人たちと繋がり合っていくこと……。これまであまりに個人主義的で、経済至上主義的に走り続けて来た現代社会が立ち止まって、もう一度自分たちの在り方を見直す所に来ているのだと思えてなりません。

「あなたがたに平和があるように」。命の神が創られたこの世界から傷ついている部分が無くなり「神の平安、シャーローム」が実現しますように。そのために私たちは、今日も、復活の神様と共にあってここから派遣されて行きます。